HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2019年度 社会教育研究室大学院ゼミ活動報告
Citation	社会教育研究, 38, 37-38
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80494
Type	bulletin (article)
File Information	004-0913-0373-38.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2019 年度　社会教育研究室大学院ゼミ活動報告

1. 2019 年度の社会教育研究室大学院ゼミの活動について

近年北海道大学大学院教育学院の社会教育研究室は所属人数が増え、問題意識やテーマも多様化している。2019 年度は、社会教育職員論、地域づくり、市民活動、アート活動、居場所づくり、子ども・若者支援など、多様な分野に関心を持つメンバーが集まっていた。新自由主義体制の浸透による競争的な教育観、人間観、そこから生み出される社会的排除の問題は共通の問題意識としてあるが、北海道大学の「社会教育」研究室に集まる我々の共通の関心とは何か、“私たちなりの社会教育とは何なのか“を言葉にしていくことが求められていた。私たち（北大）の共通関心・対象である社会教育の概念を改めて問うという課題に迫るため、具体的なゼミ活動としては、所属大学院生が、関心のあるキーワードをもとに 3 つの班に分かれ、文献講読や議論を通して全体のゼミの場で報告していった。その 3 つの班とは、①社会教育実践で実現すべき価値やめざすべき方向性、②社会教育実践の内容と方法、③現代の主体形成に関わる学習過程の 3 つである。なお、関心のあるキーワードについては、松田武雄編著『社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ』、特に宮﨑隆志「暮らしづくりの支援における価値とその意義」の講読後に共有されたものである。

3 班に共通するキーワードとして対話・協働・表現・コミュニティが浮上したため、それらを包括する実践事例として大阪の釜ヶ崎（あいりん地域）で活動をされているアート NPO「NPO 法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)」を位置づけ、当該 NPO の実践に即して理論的課題を検討することとした。2019 年 11 月 28 日にはココルームの代表である上田氏と当事者の伊藤氏にお越し頂き研究会を開催した。各班からそれぞれの関心を話し、上田氏と伊藤氏にインタビュー、お二人を交えて意見交換を行った。

2. 3 つの活動報告の位置づけ

このあとに続く 3 本の報告は、2019 年度に活動した 3 つの班ごとに“私たちなりの社会教育とは何なのか“という問いにそれぞれの視点から迫ったものである。

一つ目の報告「地域社会教育における価値としてのアニマシオン」では、「魂の躍動」、「愉しさ」というアニマシオンの価値が、協働的活動により生成されていく過程を描いた。また、矛盾を乗り越える中で生成されたアニマシオンは、自己疎外や社会的排除を克服する人間回復の手立てとなり得る可能性を見出した。

二つ目の報告「社会教育的ケアの構想」では、排除的・競争的な人間関係に抗して、協働活動を通して「ともに在る」ことができる相互承認的な関係性を生成する方法を社会教育的ケアと措定した。そして事例検討により、コミュニティ（地域）において、日常的なコンフリクトを乗り越える過程で、深い交流が生まれ、お互いの物語や経験を共有し合うことによってそのような関係性が生成することを明らかにした。

三つ目の報告「社会教育研究における学習論」は、実践分析を通して個人が持つ学習資源と地域・コミュニティにある学習資源とが相互に関連し合うことで、自身の生活や価値観の捉え直しや従来のものの見方と枠の拡張、そして個人の自由度が高まっていくということに繋がる可能性を見出した。

各班の活動報告の内容の検討はゼミ全体での議論をもとに行なったため、内容が重複している箇所もある。各班の議論を踏まえ、研究室として新たな社会教育概念を提起することまでに至らなかったことは課題として残る。また、これまでの国内外の社会教育研究の到達点と課題を設定するところまで至らず、今の自分たちの関心を言葉にする程度に留まっているが、私たちの社会教育研究が向かうべき方向性は示せたように思う。

３．NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）について

3 つの報告に共通する内容として、上述したココルームの活動に関わる研究会でのインタビュー、議論をもとに、実践分析を試みている。

ここではココルームの概要を記載しておく。アートNPOである「NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）」は大阪の釜ヶ崎（あいりん地域）で活動している。2003年から2007年まで新世界・フェスティバルゲートで「新世界アーツパーク事業」の一環として、ライブや芝居などを上演する舞台とカフェを運営してきたが、事業終了後、2008 年１月から釜ヶ崎に移転し、15 人も入れば満杯となるような、小さな事務所兼喫茶店を拠点とした。2012年から「釜ヶ崎芸術大学」をスタートさせ、まちを大学とみたて、さまざまな施設を会場に誰でもお互いに学び合う場をつくっている。そして2016年春には「ゲストハウスとカフェと庭　ココルーム」、2019年12月には「本間にブックカフェ」を開設した。これらの活動の展開に共通する問題意識は「表現の場をつくる」ことであった。

今回の報告の検討では、表現の場づくりの一つとしての「井戸掘り」に焦点を当てた。これは釜ヶ崎芸術大学の取り組みとして、2019年前期に行われた活動で、ココルームの庭に自由参加で井戸を掘る実践である。土木建設や港湾関係の仕事につき、社会の雑業をこなし、日本の高度経済成長をささえてきた「おじさん」たちを講師（ナビゲーター）とし、作業方法や知見を教わる取り組みであった。

3つの報告内においても、それぞれの関心から見たココルームの位置づけや活動の紹介を行っているため、詳細は各報告をご確認されたい。